

(報告様式 B)

【特色あるフロンティアスクールの取り組み事例】

都道府県番号	23
都道府県名	愛知県

()

学校名及び規模

豊川市立南部中学校										
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数	
学級数	6	6	7	-	-	-	2	21	41	
児童数	222	236	258	-	-	-	7	723		

実践研究の概要

・主題

「確かな学びを子どもたちに - 一人一人を大切にした教科指導 - 」

・テーマ設定の趣旨

「確かな学び」とは「生きる力」を育むための学び、すなわち自分で課題を見つけ、自ら学び考え、主体的に行動し、よりよく問題を解決する資質や能力を育むための学びと捉えた。この「確かな学び」を、生徒が最も多くの時間をかけて学習活動をしている教科の学習で身に付けさせようと考えた。

さらに、「確かな学び」に迫るため、まず教師・教科間で「基礎・基本は学習指導要領に示された内容である」との共通理解を図った。そして、基礎・基本を押さえ、一人一人の学びに応じたきめ細かな指導を図るために「少人数授業」や「TT授業」を多様な教科で取り組んだ。

実践研究の内容について

() 研究体制の工夫

少人数授業のよりよい指導方法・指導体制の在り方について、クラス編成の手立てを単元や領域によって変えたり、学級集団を母体として学習集団を形成するなど工夫を重ねてきた。この中で、習熟度学習に合ったクラス編成の方法や単元・領域を明らかにしようとした。

また、TT学習では、授業展開に応じてT1・T2の関わり方を工夫したり、全く異なる題材を並行して指導する形態、単元の内容によってTT授業であったり少人数に分割したりする形態など、様々な授業形態を試みてきている。

【実施教科】

少人数授業 数学(1年通年、2年半期、3年半期)、英語(3年通年)

TT授業 英語(1・2年通年)、理科(1・3年通年)、音楽(2年通年)

美術(3年通年)、技術家庭(2・3年通年)

これらの実践を通して、子どもの学習実態に合わせた教材(ワークシートなど)や、自らの学習を見つめることのできる手立て(学習カードなど)の開発が重要であることが明らかになってきた。

() 実践研究の内容

(1) 実践例(第3学年英語科「UNIT4」)

昨年度は2クラス3コースで、週3時間を全て少人数授業を行ってきた。「授業がわかりやすい」「英語に接する機会が増えて嬉しい」などの生徒の声が聞かれる一方、「2クラス合同になることで、生徒同士に不必要な緊張感が生まれてしまう」「担当する教師が変わると教え方が変わり、生徒が戸惑う」などの反省もあがってきた。

そこで、本年度は1クラスを2つに分け、週2時間を少人数授業、残り1時間を一斉授業にするという形で取り組んだ。内容に応じて少人数授業と一斉授業を上手く使い分けていくことで、効果的な学習を進めるよう工夫をした。

(2)学習カード（自己評価カード）を生かす

この単元のねらいは2つある。1つは不定詞の特殊な用法の形を理解し、簡単な表現ができることである。もう1つは、本文の場面や読み手の気持ちが伝わるような読み方ができることである。生徒自身が、学習のねらいを理解し、意欲を継続して取り組むことができるよう自己評価カードを作成した。これによって、生徒は単元の学習の見通しを持てるばかりでなく、自らの学習を振り返りながら自主的に復習をしたり、次時の授業に期待感をもって臨む姿が見られるようになった。

(3)ワークシートを工夫する

生徒にとって学習の手引きとなるよう、コースごとにワークシートを準備するようにした。新出表現の定着を目的としたワークシートや、音読練習の手立てとなるワークシートに評価の観点や自己評価も取り入れることで、学習のポイントをつかむことができる工夫をした。

(4)発展コースの指導から

単元当初のhow+to~の学習では、全てオーラルで導入を行い、生徒の興味を引きつけるようにした。教師がある料理のレシピを英語で読み上げ、料理名を推測させる。そこで、“This is how to make ”の文を導入し、「~の作り方」の表現を説明する。続いてワークシートのいろいろな料理のレシピを読み、その作り方を知っていたかどうかを英文でまとめた。

This is how to make . I knew (didn't know) how to make .
さらに、疑問文にすることで、友達との問答をさせた。

Did you know how to make .

Yes, I knew how to make . No, I didn't know how to make .

発展コースの生徒には文型練習的な基本文の定着だけでは物足りない。料理に関する情報を聞き取ったり、または読み取るという課題を与えることで、“how to~”の文を使うことに意味を持たせることができた。

(5)補充コースの指導から

Reading for communication では読みのテストを7時間目に行うこととし、その前時に「本文の場面や読み手の気持ちが伝わるような読み方ができる」よう、意識して練習させた。補充コースの生徒には、まずイントネーションをつかませるためにCDテキストを見せながら、何度もCDを聴かせた。そして、上がり下がりのラインと実際のイントネーションをつかませながら音読練習をした。少人数なので、おおげさに感じられる表現でも安心して声が出せ、熱心に反復する姿が見られた。また、読むことに自信の持てない生徒には机間巡視をしながら個別に指導にあたる時間を取ることもできた。

事前評価では、発展コースと同様一人一人の音読を聴き、ワークシートのチェック欄にアドバイスを書き入れた。良い点を誉めたり、改善点について助言するなど、事前に評価してやることで、よりよい音読を目指して熱心に練習する生徒の姿が見られた。

(6)評価の方法

生徒たちには「意欲」「表現」の2観点で評価することと、その基準を事前に説明しておいた。「意欲」については「英文を暗記して発表しているかどうか」で、「表現」については「声の大きさ」「発音」「イントネーション」をもとに総合的に評価していった。実際のテストでは、2人の教師で評価する場合と1人の教師で行う場合があった。

一斉授業では2人の教師が観点の分担をし、より適正な評価ができるよう工夫した。発音のチェックでは、一人の教師が生徒に寄り添って口の動きを見、もう一人が声の大きさやイントネーションを確認するなどの工夫をした。また、生徒による相互評価も行わせることで、良い点が称賛を受け、英語を表現することに自信を持てた生徒もある。

少人数に別れて実施する場合は、表現の評価を1回のみで行うのは難しいため、別室でテープに録音しながら音読テストを行った。その時点では発音のみをチェックし、それ以外は録音した音読テープで判断した。複数の教師で評価するほうが正確であるが、人数が少ないのでこの方法でも大きな負担はなく、一人一人の生徒のがんばりを発見することのできる機会にもなった。

評価基準はどのクラスも同じであるので、同じ授業形態で評価を実施する方が望ましいと言える。しかし、こうした異なる評価方法を使い分けることも、次の授業での学習活動に生かすことができるのではないかと考えている。

() 成果と課題

少人数授業を効果的に行うには、生徒の実態をふまえながら、教科の特性、単元や領域の学習内容の特性に合わせたクラス編成を工夫することが必要であると考えている。そして、学級集団を基にした学習集団の形態が、生徒には安心感を持って学習に取り組みやすいこと

がわかってきた。

また、学習カードやワークシートを適切に提示していくことは、生徒自らが意欲を持って学習を進めていく手立てとなることがわかった。今後は、学習の見通しが持ちやすく、自己の学びを見つめることのできる学習カードの工夫改善を図っていききたい。さらに、単元全体を見通したワークシートの開発を行いたい。習熟度が異なっても共通利用できるもの、コース独自の学習内容や方法に適したワークシートを工夫することで、生徒が容易に学習を深めることができるような手立てとしていききたい。

() 成果の普及方策

(1) 南部中学校ホームページへの実践結果の掲載 (平成15年12月)

(<http://academic3.plala.or.jp/nanbu-jh/>)

(2) フロントアスクール相互による情報交換・教育系諸紙への寄稿など

東京都指導主事会7名訪問 (平成14年9月17日)

・「授業参観および学校概要・研究概要説明」

福島県いわき市教育委員会に研究実践資料を提供 (平成15年2月)

・「少人数授業・時間割編成・教材の開発等」

「子どもを育む評価」<三河教育研究会・調査委員会編> (平成15年3月)

・「活動の意欲化を図る評価の工夫」の実践を寄稿

栃木県河内郡古里中学校職員1名訪問 (平成15年3月17日)

・「学力向上フロントア事業」について情報交換および意見交流

佐賀県伊万里市立伊万里中学校職員2名訪問 (平成15年3月19日)

・「学力向上フロントア事業」について情報交換および意見交流

日本教育新聞に本校研究実践を寄稿 (平成15年1月14日版)

・「弾力的な授業時間の設定 (短い時間)」

教育新聞に本校研究実践を寄稿 (平成15年7月14日版)

・「確かな学びを子どもたちに - 基礎・基本重視した教科指導 - 」

平成15年度愛知県中学校教育課程フォーラムにて本校の実践発表

(平成15年7月15日)

・「理解習熟程度に応じた指導の在り方・生徒が自分自身のものとする評価」

教育愛知に寄稿<平成15年12月号> (平成15年9月)

・「確かな学びを子どもたちに - 基礎・基本重視した教科指導 - 」

豊田市立逢妻中学校職員3名訪問 (平成15年10月21日)

・「学力向上フロントア事業」について情報交換および意見交流

千葉県千葉市立轟町中学校職員1名来訪 (平成15年10月27日)

・本校実践について情報交換および意見交流

「学力向上作戦プラン」<明治図書>に寄稿 (平成15年10月)

・「確かな学びを子どもたちに - 基礎・基本重視した教科指導 - 」

「絶対評価の実践情報」<明治図書>に寄稿 (平成15年10月)

・「学びの姿を映し出す評価に (絶対評価・単元評価カードなど)」

小坂井中学校校内現職研修会に職員参加 (平成15年11月10日)

・本校フロントアティーチャーが本校実践について報告

神奈川県相模原市立相原中学校職員来校 (平成15年11月10~14日)

・本校実践について情報交換および意見交流・授業参観等

京都府山城教育局管内小・中学校教員管外派遣研修教員9名来校

(平成16年1月22日)

・本校実践について情報交換および意見交流

袋井市周南中学校職員2名来校 (平成16年1月27日)

・「学力向上フロントア事業」について情報交換および意見交流

海部郡十四山村立十四山中学校職員2名来校 (平成16年1月28日)

・「学力向上フロントア事業」について情報交換および意見交流

研究協議会の開催<予定> (平成16年6月11日(金))

・テーマ「確かな学びを子どもたちに - 一人一人を大切にした教科指導 - 」

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】	15年度からの新規校	14年度からの継続校		
【学校規模】	3学級以下 7～9学級 13～15学級	4～6学級 10～12学級 16学級以上		
【指導体制】	少人数指導 その他	T・Tによる指導		
【研究教科】	国語 外国語 保健体育	社会 音楽 その他	数学 美術	理科 技術・家庭
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】		有	無	

【特色ある取組としての紹介したいポイント】

生徒自身が、学習のねらいを理解し、意欲を継続して取り組むことができるよう自己評価カードを作成し、それによって、生徒は単元の学習の見通しを持てるばかりでなく、自らの学習を振り返りながら自主的に復習をしたり、次時の授業に期待感をもって臨む姿が見られるようになった点を特色ある取組としての紹介したい。